

わたずん ニュース

I T A M I S H I K O N C H U K A N N E W S

第45号 2025/8

特集 鳴く虫と郷町の20年



ほっとパーク昆陽池

昆陽池公園のよくみるアリとめずらしいアリ

昆陽池公園のアリは、25 種以上を確認していますが、今後の調査でさらに多くの種が見つかるものと思われます。ここでは、よくみるアリとめずらしいアリをいくつか紹介します。

(長島聖大)

※ 体長は働きアリのものを示します

■クロオオアリ *Camponotus japonicus* 体長: 7.0-12.0 mm【よくみるアリ】

昆陽池公園で見つかるアリでは最も体の大きな種です。林の周辺でよく見つかります。



クロオオアリ

■クロヤマアリ *Formica japonica* (s. l.) 体長: 5.5-6.0 mm【よくみるアリ】

灰色がかった黒色の体で、クロオオアリの次に大きいアリです。地面をせわしなく走り回ります。



クロヤマアリ

■トビイロケアリ *Lasius japonicus* 体長: 3.0 mm 【よくみるアリ】

木の根元などに営巣し、よく行列を作っているアリです。



トビイロケアリ

■トビイロシワアリ *Tetramorium tsushimae* 体長: 2.5-3.0 mm 【よくみるアリ】

地面をながめると最もよくみつかるとアリのひとつです。巣穴周辺には砂粒が目立ちます。



トビイロシワアリ

■アミメアリ *Pristomyrmex punctatus* 体長: 2.5 mm 【よくみるアリ】

小さくずんぐりとした体のアリです。大行列を作って引っ越しをすることがあります。



アミメアリ

■サムライアリ *Polyergus samurai* 体長: 5.5-6.0 mm 【めずらしいアリ】

クロヤマアリの巣を襲って、幼虫やさなぎをうばい取って奴隷にするという習性を持ちます。一年に数回だけ、とても暑い日に地上に出て奴隷狩りをしますが、めったに観察できません。



サムライアリ

■ウロコアリ *Strumigenys lewisi* 体長: 2.0 mm 【めずらしいアリ】

林の中の朽ち木や石の裏でひっそりとくらしています。トビムシを好んで捕食します。



ウロコアリ

むしムシ虫眼鏡

Vol.29 ほほ球体 ニセセマルヒョウホンムシ



ニセセマルヒョウホンムシは、ほほ球体の体をしたとても変わった姿の昆虫です。飛ぶための翅は退化していて、歩くか転がるかしかできません。

＜ニセセマルヒョウホンムシ＞

学名：*Gibbium aequinoctiale*

分類：コウチュウ目ヒョウホンムシ科

体長：2.0 - 3.0 mm

本種は煮干しやペットフードなどの乾燥した動植物質を食害する、家屋内害虫として知られています。また、屋根裏のネズミの死体などからも発生することがあるようです。



煮干しの中に入り込む幼虫（飼育下のようす）

害虫とされながらも出会う

機会は多くなく、筆者にとっては実物を見てみたいあこがれの昆虫の一つでした。最近、生きた個体を譲っていただいたので、累代飼育と生体展示に挑戦しています。（長島聖大）

亜熱帯の温室から

Vol.29 時計みたいな花

南国の果物、パッションフルーツはご存知でしょうか？食べたことのある方もいるでしょう。花をご覧になったことはありますか？チョウ温室中央の園路脇に青々とした葉っぱとツルが生い茂っており、よく探すと葉っぱに隠れがちに咲く白い花や赤い実が観察できるかもしれません。花の様子はとても変わっていて、まず気づくのは白と紫色のヒゲ状のもの（副花冠）がおおよそ100本、そして5つの雄蕊と3つの雌蕊です。副花冠の背後に5裂する白い花弁と同じく5裂する白色の萼片があります。この花の様子を時計に見立てたのでしょう、和名はトケイソウ（時計草）。学名の *Passiflora* は情熱という意味ではなく、ラテン語でキリストの受難を表していて、雌蕊や雄蕊に見られる十字の形に由来するそう



トケイソウの花と実

です。葉の付け根から蜜（花外蜜腺）を出し、おそらくアリを呼び寄せています。綺麗な花ですが温室のチョウが吸蜜に訪れることはほとんどなく、野外でのポリネーターとされる大型のハナバチもいませんが、ツルの上をアリがよく歩いています。1日で枯れてしまう1日花でチョウも来ないのに、しっかり受粉し赤い実をつけているのはアリが受粉を助けているからかも知れません。（野本康太）

＜クダモノトケイソウ＞

学名：*Passiflora edulis*

分類：トケイソウ科トケイソウ属

特集

なむしごう 鳴く虫と郷

「鳴く虫と郷町」は地域の商店や施設と一緒に伊丹市中心市街地にスズムシ今年 20 回目を迎えます。他にはないユニークな事業の歴史を振り返ります。

鳴く虫たち、伊丹の中心市街地へ



企画展「秋の鳴く虫」全景（左；2004 年）、懐中電灯で観察する鳴く虫の生体展示（右；2005 年）

●企画展「秋の鳴く虫」

秋に鳴く種が多いコオロギやキリギリスの仲間は「秋の鳴く虫」と呼ぶことがあります。当館では開館して間もなくから、企画展「秋の鳴く虫」を秋の定番企画展として開催していました。1996 年からは筆者（坂本）が担当し、生きた昆虫展示と鳴く虫を楽しむ文化を紹介してきました。和風に飾り付けた展示室で、くつろいで鳴き声を楽しむスペースや、暗くした展示室に懐中電灯を照らして生きた昆虫を観察する展示方法はお客様にも好評でした。



第 1 回「鳴く虫と郷町」の旧伊丹郷町館の展示（2006 年）。現在とほとんど変わりませんが、虫はカゴ、壺、瓶に入れ、プラスチックケースはありませんでした。虫の名はダイモテープ（エンボス加工の樹脂製テープ）にひらがなで打ち、石に貼り付けていました。

●「鳴く虫と郷町」に協力

2006 年に財団法人伊丹市文化振興財団（当時）の職員だった中脇健児さんから中心市街地にある「伊丹郷町館（当時）」での展示依頼を受け、協力することでスタートしたのが「鳴く虫と郷町」です。中脇さんとは当館で開催した「はちみつカフェ」というイベントなどで交流があり、企画展「秋の鳴く虫」を見てひらめいたそうです。伊丹郷町館は江戸時代に酒造業で栄え「伊丹郷町」と呼ばれた中心市街地にあり、国指定重要文化財「旧岡田家住宅・

酒蔵」などを公開している施設です。雰囲気ある会場の魅力とともに中心市街地で展示できることに意義を感じて協力し、伊丹郷町館と三軒寺前広場で展示しました。お客様からは風情を感じる」と好評を博し、文化施設と昆虫館という異分野のコラボとしても注目され、複数のメディアで紹介されました。

●中心市街地一帯へと拡大

2 年目には 6 つの商店街が参加して規模が急拡大し、伊丹郷町館はメイン会場となり、当館も主催者の一員となりました。3 年目には市立博物館やこども文化科学



商店街の世話人の方々への飼育講習会（2007 年）

館などの市内施設が展示やイベント開催で参加するようになりました。多彩な関係者は「ぼちぼちいこ（ゆっくりやりましょ、の意味）」を合言葉に、年 2 回の実行委員会やメーリングリストで情報共有や意見交換し運営に参加してくださいました。規模の拡大で展示昆虫数が増え、その確保も課題となります。その解決策として採集や飼育をイベント化した「初夏のキリギリスハンター」や「鈴虫里親プロジェクト」をスタートし、現在も続いています。商店や市民グループなども企画者として参加し、鳴く虫と郷町は虫や秋をテーマにみんなで街を楽しむ事業へと成長していきました。



市民グループが企画した、市街地にある武道場「修武館」でのコンサート。（2009 年）



柿衛文庫による鳴く虫を読んだ俳句の展示（2009 年）



商店での鳴く虫展示（2011 年）



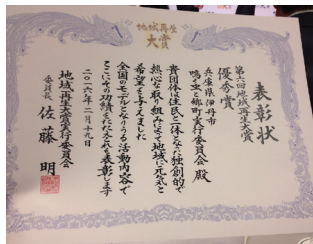
終了後の実行委員会。この年は成果や課題をまとめて新聞風にしました（2010 年）

ちょう 町の20年

などの「鳴く虫」を展示し、多彩なイベントを行う事業です。このイベントが

みんなで続け、伊丹の秋の定番行事へ

●地域再生大賞優秀賞に



地域再生大賞優秀賞の賞状

鳴く虫と郷町は街なかで虫の音を楽しむという点や、博物館だけでなく商店会や公共施設、市民など大勢の人々が力を合わせて実施しているのが、他の地域にはない特徴です。そのため事業を外に紹介する機会にも恵まれ、2つの書籍で鳴く虫と郷町を紹介しました。また2016年にはまちづくりや地域活性化の優れた活動を表彰する「地域再生大賞」の優秀賞を、鳴く虫と郷町実行委員会で受賞しました。

●みんなで作る体制へ

多くの人に関わる運営体制をさらに強化するため、施設担当者や商店会などの有志でグループを作り、1～2ヶ月に1回会議を行うようになりました。当館もその一員として参加し、現在ではこのグループが新たな実行委員会となり、イベントや展示開催者が集まる企画会議とあわせて運営をしています。さらに、里親のように飼育や展示で事業を支えてくださっている人も沢山いて、鳴く虫と郷町づくりに関わっている人は数百人にのぼると考えています。みんなで作り、みんなで楽しむのがこの事業のスタイルです。

新型コロナウイルスの世界的流行下にあった2020年、2021年は、密閉・密集・密接を避けるために各地で多くのイベントが中止に追い込まれました。鳴く虫と郷町でも人が集まるイベントはできませんでしたが、密集しないように配慮しながら規模を縮小して開催を続けました。こういった対応も議論を重ねることによって決めていきました。



規模縮小でチラシも小さくしました（左：2019年のA2チラシ、右：2020年のA4チラシ）

●これからも、虫で季節を感じる行事へ

虫を展示する店主さんから「終わっても外の虫が鳴いているので、終わった気があまりしない」と言われたことがあります。事業を始めた頃は「街なかには虫が鳴いていないから展示してくれて嬉しい」と喜ぶ声がありました。でも実際は、以前から鳴く虫は街なかにも棲息していて、私たちのほうが気づいていなかっただけ



週末に街路に並ぶ行灯は鳴く虫と郷町の夜の名物。行灯はすべて木工の得意な商店会の方一人による手作りです。出し入れは行灯の前の店舗や施設が毎日行っています（写真は2018年）。



「クツワムシの館」として毎年クツワムシを飼育展示するバー。鳴き声は太迫力です（写真は2012年）



限定商品を出すお店もあります。写真はイモムシパン（2023年）



虫が鳴く会場での音楽イベントは定番。広場でこのライブ（2012年）



鈴虫里親プロジェクトの鈴虫配布会（2018年）

かもしれません。この事業がそんな人たちに身近な虫の音に気づききっかけを与えたのだとしたら、素晴らしいことだと思います。

事業を始めて数年たった頃から、広場などで設営をしていると「今年ももうそんな季節だね」と道行く人から声をかけられることが増えました。近年は、企画会議に参加する人からも「子供の頃から鳴く虫と郷町を知っていた」という声を聞くことがあり、長年の開催で地域の秋の定番になってきたと感じています。鳴く虫と郷町がいつまで続くかはわかりませんが、鳴く虫の声に気づき、楽しめる環境がいつまでも続いてほしいと願っています。

今年の鳴く虫と郷町は9月5日から14日まで開催します。暑さの残る季節ですが、夜のイベントやメイン会場の夜間開館もあります。どうぞお越しください。（坂本昇）

「さいきんの

累計入館者数500万人達成！

伊丹市昆虫館では、1990年11月の開館から約34年6カ月となる5月4日（日）に、累計入館者数500万人を達成しました。

これを記念して、チョウ温室でセレモニーを開催しました。当館の指定管理者である公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団理事長 二宮叔枝、常務理事 田中茂、当館副館長 野本康太らが出席し、500万人目のお客様に認定証、オリジナルグッズ、ミュージアムショップで使える商品購入補助券の記念品を贈呈いたしました。



記念写真（左4人：飯野さんご家族、右2人：（公財）いたみ文化・スポーツ財団理事長・常務理事）

した。また、サナギから羽化したばかりのチョウを温室にはなつ放チョウ体験も楽しんでいただきました。

500万人目となったのは、三田市からお越しの飯野さんファミリー。

貴広（たかひろ）さんは「今回2回目の来館でまさか500万人

目ということでもとてびっくりしました。中々外に遊びにいっても虫とふれ合うことは難しい。ここに来ればいつでも虫に会えるので、子どもたちのためにも長く長くこの場所を残してほしいと思っています。めざせ1000万人!」と語ってくださいました。また、ハチに興味があるという湊介（そうすけ）さん（11歳）からは、「これからもがんばってください。」というご声援をいただきました。

これまで当館に足を運んでくださった皆様、応援して下さった皆様、ありがとうございました。これもひとえに、皆様の温かいご支援、ご愛顧の賜物と感謝申し上げます。

引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。（西 史夏）



放チョウ体験の様子

ひらひら飛ぶよ！チョウトンボ

チョウトンボというトンボをご存知でしょうか？伊丹市内では普通に見られる種ですが今年は天気の良い午前中や夕方に高い木の上などを数十匹の群れで飛んでいる姿をよく目にします。翅の大部分が濃い青色や黒色をしており遠くからでもよく目立ち、見る角度によってキラキラと光って見えるのも特徴です。チョウのようにヒラヒラと舞い飛ぶことがチョウトンボの名の由来でしょう。

ヨシなどの繁茂する池沼や河川敷の淀みなどを好ため昆陽池公園や緑ヶ丘公園は格好の生息環境と思われます。7月に入ると昆陽池の水際で縄張り争いをするオスたち、後尾をするペア、オスが近くでガードする中メスが打水産卵する様子などが観察できます。群れ飛ぶ理由については明確なことはわかっていないようです。未成熟個体が飛翔しながら小さな

虫を捕食している？集まることで天敵を回避している？オスとメスの出会いの場？など様々な考えがあるようです。そして気になるが夜間の休憩場所。樹上などで集団ねぐらを作っていたら面白いなあと想像してしまいます。本州、四国、九州に分布するチョウトンボは6月から9月ごろまで見られるようです。あなたの身近にチョウトンボはいますか？（野本康太）



チョウトンボ オス



チョウトンボ メス

飼育室から

「認定希少種保全動植物園等」に認定されました

「認定希少種保全動植物園等」の制度は、種の保存のために希少野生動植物種の飼育をしている、一定の基準に適合した動植物園等を、環境大臣が認定するものです。この制度は種の保存法第48条に規定されており、実務的には認定施設間同士の希少野生動植物種の生体の移動が事前許可不要になる、という利点があるものの、実際には名誉的な側面が大きいものです。当館は、国内希少野生動植物種7種（オガサワラハンミョウ、フサヒゲルリカミキリ、フチトリゲンゴロウ、ヨナグニマルバネクワガタ、オキナワマルバネクワガタ、ウケジママルバネクワガタ、ウスイロヒョウモンモドキ）での認定となります。中でも、オガサワラハンミョウの生息域外保全は2011年から継続しており、その他の種も5年以上の



飼育実績があります。今後も当館は、生息域外保全だけにとどまることなく、飼育個体の野生復帰や生息環境の改善等、生息域内保全につながる働きかけをしていきたいと考えています。（田中良尚）



オガサワラハンミョウ



フサヒゲルリカミキリ



フチトリゲンゴロウ



ヨナグニマルバネクワガタ



オキナワマルバネクワガタ



ウケジママルバネクワガタ



ウスイロヒョウモンモドキ

まゆをつくるいもむし・けむし

ここ数年、筆者はいもむし・けむしを紹介する展示を続けてきました。今年は「繭（まゆ）」に注目した展示、「プチ展示 まゆをつくるいもむし・けむし」を開催しています（会期：2025年4月22日～9月29日）。

繭とは、幼虫が蛹になる際に、体内から分泌される糸や物質を用いて作る保護室のことを指します。繭というと、絹糸を取るカイコの繭が有名です。しかし、他にも繭には様々な形や材料で作られたものがあります。

例えば、ヤママユはカイコと同じような形の繭を作りますが、あざやかな緑色をしています。同じヤママユガ科のクスサンも幼虫が吐いた糸によって繭を作るものの、とても粗くて中が透けて見えます。

また、ドクガ科やカレハガ科のけむしは、自身の毛を抜き取り、それを糸で紡いで繭を作ります。特にカレハガ科の繭には、毒針毛が散りばめられており、幼虫よりも繭に触れる方が危険な場合もあります。

イラガ科のイラガは、お尻からシュウ酸カルシウムの白い液を、口からはタンパク質を含む褐色の液を分泌し、それらを層状に塗り付けることによって鳥の卵のようなかたい繭を作ります。こうして出来る繭の模様には様々な個性が見られます。

ここで紹介した繭はほんの一部ですが、今回の展示を通じて、繭の美しさや不思議さに触れ、いもむし・けむしの生き方や進化の奥深さに興味を持っていただければ幸いです。（前畑真実）



ヤママユ



クスサン



ツガカレハ



イラガ

第1展示室に鳴く虫ブースを新設しました！

拡大した森に入りこんで昆虫を探すことができる「10倍の森」。ここに虫の声を流し「聴く」「触る」感覚を使って体験できるブースを追加しました。

場所は入口から10倍の森を真っすぐ進んだギリギリの模型横です。ここに天井から指向性スピーカーで鳴き声を流し、聞いていただくことができます。鳴き声は、スズムシ、ギリギリシ、マツムシ、クツワムシ、エンマコオロギの5種類です。

あらゆる世代の方や障がいのある方も楽しめるユニバーサル展示を目指し、「触って」虫のカタチを確かめる拡大模型や点字での解説を加えました。スマホでQRコードを読み込み映像を楽しむこともできます。ぜひお立ち寄りください。

展示づくりには、市内の障がい者団体の皆様にアドバイスをいただきました。またこの展示は株式会社近畿地域づくりセンター様から伊丹市へのご寄付を活用して設置しました。お礼申し上げます。(坂本昇)



昆陽池公園のゲートサインが新しくなりました

昆虫館の北側にある昆陽池公園入口のゲートサインを新しくしました。これまで文字だけでしたが、入館のワクワク感を高めていただけるよう、館のリーフレットに使われているイラストをあしらったデザインにしました。通る際にはどうぞご覧ください。(坂本昇)



特別展「いたこんカーニバル 2025」

新型コロナウイルスが流行する前まで定番だった、夏の体験型特別展が復活しました。最後のいたこんカーニバルは2013年です。今回はカマキリ屋台、ごきぶり屋、水生生物屋台、てんとうむし屋台、むしのうんこ屋台をはじめ、カブクワジャンボケースなどたくさんのコーナーがあります。むしむしクイズやきぐるみ、お面、わなげなど体験もあり、虫たちのお祭りに来たような空間です。2025年7月19日(土)～9月29日(月)です。ぜひお越しください。(角正美雪)



もよおしあんない

*展示・行事は、日程・内容等を変更することがあります。最新情報はウェブサイトをご確認ください。

9月

5(金) - 14(日) 鳴く虫と郷町

10月

25(土) 秋の原っぱで虫さがし(要予約)

11月

9(日) 第1回こやいけ野鳥観察会(要予約)
30(日) どんぐりカーづくり

12月

7(日) カイコのまゆクラフト
14(日) 第2回ステップアップ野鳥講習会(要予約)

特別展

7/19 - 9/29 いたこんカーニバル 2025

企画展

10/2 - 1/19 いたみの自然

プチ展示

4/23 - 9/29 まゆをつくるいもむし・けむし
5/7 - 9/1 アリ
9/3 - 10/20 カマキリ
10/1 - 11/17 祝!希少種保全動植物園等に認定!
伊丹市昆虫館での生息域外保全
11/19 - 12/28 さなぎツリー
12/17 - 3/2 身近な自然絵はがき 2025 作品展

行事の申込方法

観察会や講座等の行事の一覧は、右のQRコードからウェブページをごらんください。予約申込制の行事は、ウェブ上からお申し込みを受け付けております。往復はがき・FAXでのお申し込みをする方は、以下の要件を書いてお送りください。

1. 行事の名称
2. お申し込みの方全員(同伴含む)の氏名、ふりがな
3. 年齢(こどもは学年)
4. 電話番号
5. おすまいの市町村
6. 返信用のFAX番号(FAXがある場合)
(コンビニの送信サービスのような返信の受けられないFAX番号は不可)

往復はがき: 〒664-0015 兵庫県伊丹市昆陽池 3-1 伊丹市昆虫館
FAX: 072-785-2306



行事一覧・申し込みのウェブページ

編集スタッフより

学習室で展示しているナメタジには普段ニンジンを与えていますが、夏場はなぜかナスも食べます。(さかもと)

展示のいもむしがどんどん菌を作って、菌の展示ケースがいっぱいになってきました。最後は菌だらけになりそうです。(まえはた)

次回(第46号)発行は、2026(令和8)年2月頃の予定です。

表紙写真 三軒寺前広場の鳴く虫展示(坂本昇撮影)

いたこんニュース 第45号 Vol.23 No.1 (通巻45号)
2025(令和7)年8月発行
発行 伊丹市昆虫館
〒664-0015 兵庫県伊丹市昆陽池 3-1 昆陽池公園内
TEL: 072-785-3582 FAX: 072-785-2306
URL: <https://www.itakon.com/>
E-mail: itakon@itakon.com

編集 坂本昇・前畑真実
デザイン原案 pico pictures
印刷 アイシー印刷株式会社